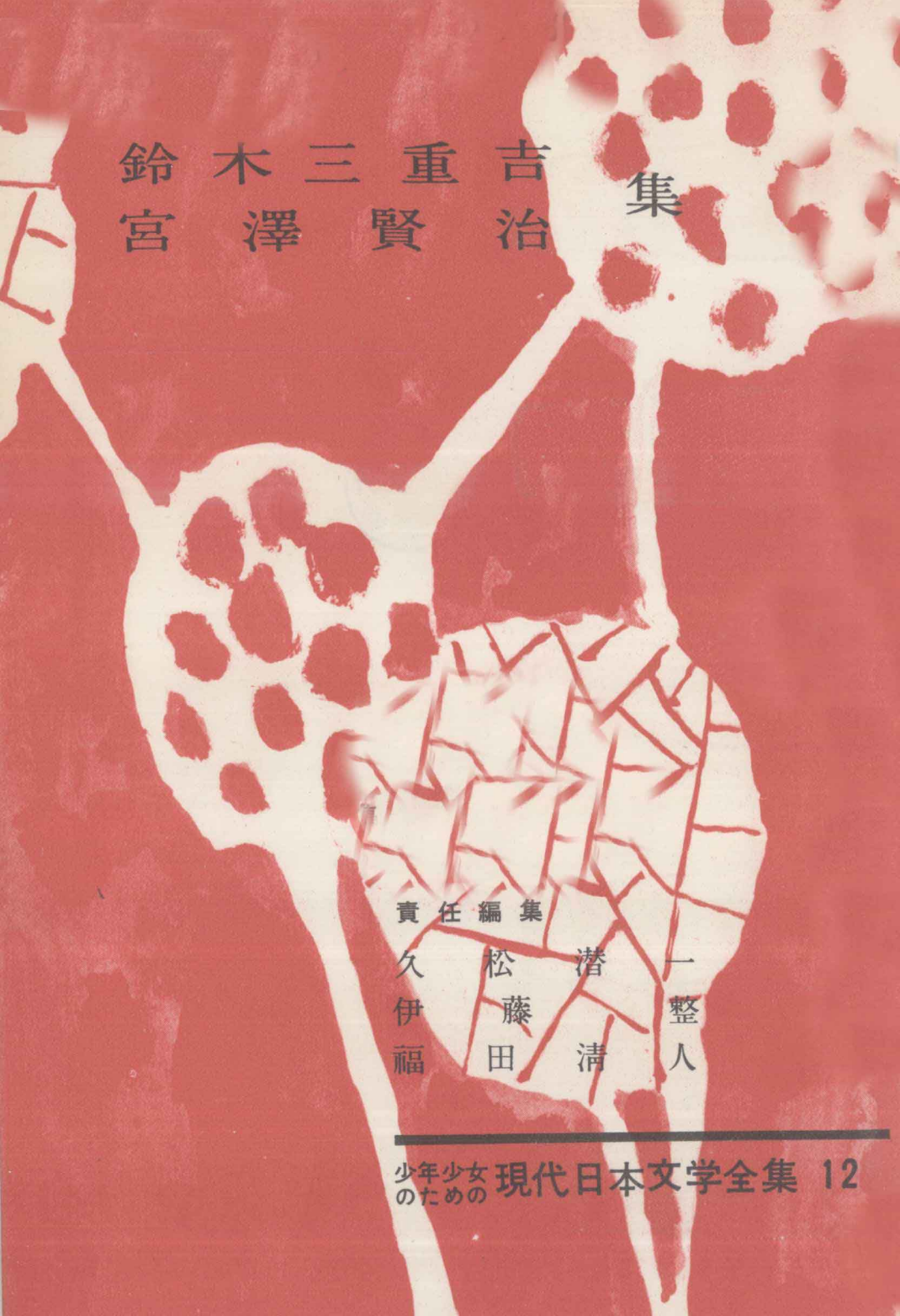


少年少女のための

12

現代日本文学全集



The background of the entire cover is a vibrant red. Overlaid on this is a large, stylized illustration of a lotus seed pod (receptacle) in white. The seed pod is shown from a slightly low angle, with its stem extending upwards and to the left. The pod is filled with numerous dark red, oval-shaped seeds. The overall aesthetic is minimalist and traditional Japanese.

鈴木三重吉集 宮澤賢治

責任編集

久伊福

松藤田

潜清

一整人

少年少女のための現代日本文学全集 12

NDC 918.6

少年少女のための

現代日本文学全集12

鈴木三重吉・宮沢賢治集

定価 二五〇円

昭和三十年八月三十日初版発行

昭和三十一年十一月十三日再版発行

発行者 小嶺嘉太郎

発行所 東京丸ビル 東西文明社

営業所 千代田区神田神保町二ノ二一

印刷 東京印刷株式会社
製本 協和製本所

この本を読む人に

すぐれた文学者は、この世や人間の真実や、美をするどくみつめて、その作品にはつきりとえがいてくれております。私たちは、それを読むことによって、私たちの心をゆたかに、美しくすることができます。

この本には、そうしたすぐれた作家たちの代表的な作品のなかから、さらに少年少女のみなさんが、読むのにふさわしいもの、ぜひ読んでもらいたいものを、えらんでのせてあります。そして学校で教わらないむずかしい漢字は、かなに改めたり、その意味をしるしたり、またかなづかいも、現代かなづかいになおして、みなさんにしたしみやすいようにしてあります。

その作品も作家のいろいろな面を示すようにしてありますが、あまりに長すぎて、この本のせきれない作品や、もつとおとなになってから読んだほうがいい部分をよくむものは、その一部をとつてのせてあるものもあります。その部分のとりかたもくふうして、その作品のあらましを知られるようにつとめました。

しかし、もちろん原作をこのように改めたといっても、原作の意図およびそ

の味いなどは、できるかぎり、そこなうことなく伝えることができるよう苦心しました。だから実際は、このまゝを原作と考えても、さしつかえがないと思っております。

最後に、解説として、その作家の一生や、その作品の説明がつけられております。一つの作品をよく味わうには、それがどのような作家によつて書かれたか、その作家の一生、ひととなりを知ることが、きわめてたいせつであります。それで初めに、解説のほうを読んでから作品のほうを読むことも、作品をよく理解することができる方法でしょう。

この解説も、それを書いた人々が、たいへん興味ふかく、親切にしろしてくれておりますのできつと、作品を読むように、みなさんの心をひきつけてくれるであらうでしょう。

編集者

久松 潜一

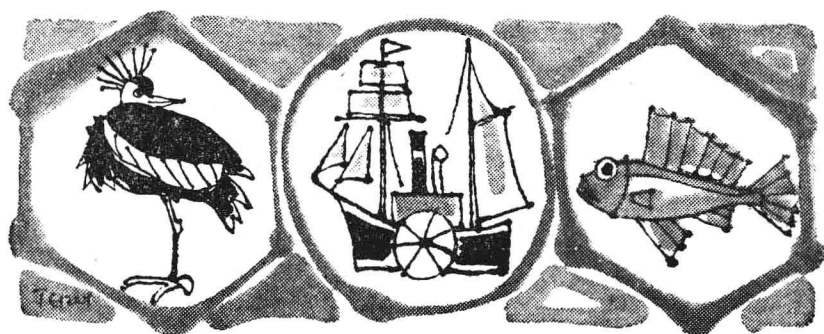
伊藤 整

福田 清人

* 本文中、唐（むかしの国）のように、かっこの中に小活字で入れてあるのは、編集部でつけた注です。

鈴木三重吉集もくじ

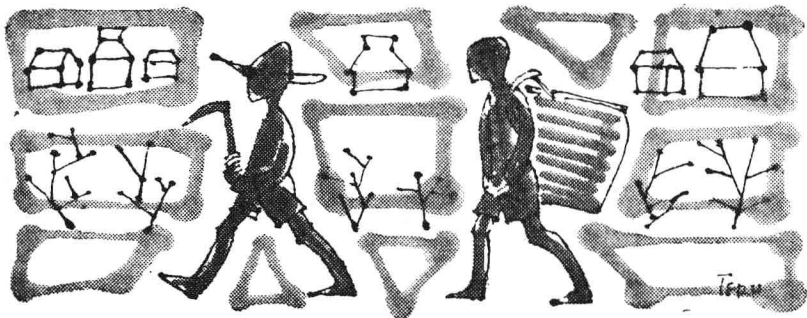
ダマスカスの賢者 ^{けんじや}	七
こりこり物語 ^{ものがたり}	一六
黒い小猫 ^{こねこ}	三一
象 ^{ぞう} のモチイ.....	四二
少年 ^{しょうねん} 駅伝夫 ^{えきでんぷ}	五三
かなりや物語 ^{ものがたり}	五五
父 ^{ちち}	九二
解説 古谷綱武.....	一〇四



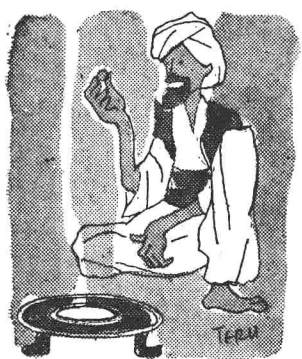
宮澤賢治集もくじ

雨 ^{アメ} ニモマケズ(詩)	三二
風 ^{かぜ} の又三郎 ^{またさぶろう}	一三
稲作 ^{いなさく} 挿話 ^{そうわ}	一六
星 ^{ほし} めぐりの歌 ^{うた} (詩)	一六四
グスコープドリの伝 ^{でん} 記 ^き	一六五
セロ弾 ^ひ きのゴーシユ	一九七
どんぐりと山猫 ^{やまねこ}	二三
カイロ団長 ^{だんちやう}	三三
解説 古谷綱武	三五

そうてい 青山龍水
カ ッ ト 山本耀也



鈴木
木
三
重
吉
集



ダマスカスの賢者^{けんじや}

—

むかし、ダマスカスという町に、イドリスというなまけ者がいました。びんぼうなくせに働くことがきらいで、年じゅう、ただごろごろねているのですからたまりません。あるとき、もういよいよ食べるものもなくなり、売

りはらうものといっ
たって、それこそ、
ぼろつきれ一つさえ
ないは、めになりました。
た。

おかみさんは、こ
れではもう、ふたり

でかつて死ねばかりです。ごしょうだから、どうぞき
ようから、お金をもうけに出てくださいと、ないてたの
みました。

「お金をもうけるって、いったい、どうすればいいんだ
い。わしは、これまで商売をしたこともないし、てんで
けんとうがつかないよ。」

と、イドリスは、なまあくびをしながらこういって、
長いあ、ひげをしごいています。

「では、ためしにわたくしのいうとおりをしてごらんな
さい。ただおほか場へ出かけて、おまいりの人がくるた
びに、口の中で、おいのりをあげるまねをしていればい
いのです。そうすれば、女の人などは、きっとお金をく
れます。これなら、あんたにもできるでしょう。」

と、おかみさんはいいました。イドリスは、いちんち
じゅう考えこんでいましたが、あくる朝になると、しぶ
しぶおほか場へでていきました。

いって、おかみさんがいったとおりをしてみますと、
なるほど、おほかまいりにきた女の人たちがすこしずつ
お金をくれていきます。イドリスは、これなら、わしに

もってこいのしごとだと、ほおえんで、それから、毎日毎日でてきては、もぐもぐと、おいのりをあげるまねをしつづけました。

人々は、イドリスの、あごをうずめた長いひげの、かっこうや、たえず、わき目もふらないで、一心にいのりいつているすがたをみて、これは、ともかく、かわった信仰ぶかい、えらい人にちがいないと、話しあいました。

しまいには、うわさに、だんだんと尾ひれがついて、あの人は、どんなことでも知っている、えらい賢者^{けんじや}で、人のひみつでもすぐにもぬいていいあてる、とてもふしぎな人だと、自分がためされでもしたように、いいふらすものさえてきました。

あるとき、イドリスは、いつものように、はか場へ出かけるのとちゅう、町の中をとぼとぼ歩いていきますと、くつのそこへくぎ^きがでつばつてきたとみえて、足の先がいたくてたまらないので、ある金ざいくしの店のまえにたちどまって、そのかたほうのくつをぬいで、中をのぞいてみました。

そのとき、その店先には、王さまが、おしのびで、ひ

とりのおともをつれて、金の指輪をなおさそにきていました。金ざいくしは、その指輪を、左手の人さし指のさきにかけて、なおすところをみていましたが、どうしたはずみか、指をびよいと動かししたひょうしに、指輪がぼんと、どこかへとんでしまいました。

その指輪が、ちょうどイドリスがのぞきこんでいるくつの中へ、ひょこりとはいったのですが、金ざいくしは、それとは気がつかないので、びっくりして店じゅうをさがしまわりました。

イドリスは、ほほう、これはいいものがとんできた。ほう、すばらしい宝石がはまっていると、にこにこして、あたりをみまわしました。さいわいに、だれも、そんなものがそのくつの中へとびこんだとは感づかないらしいので、そのまま、指輪のはいつたくつをはいて、どんどんおいそぎで、自分の家へひきかえしました。

王さまには、それがなにもにもかえられない、だいいじなだいいじな指輪だったので、たちまち町じゅうは大さわぎとなり、王さまがおこりどなる声の下で、みんなは血まなこになって、通りじゅうをさがしまわりました。

しかし、むろん、その指輪が出てくるはずありません。

王さまは、それはそれはくやしがつて、町じゅうのあらゆるうらないしや、やまじゅつ、つかいをめしよせ、指輪のありどころをうらなわせたり、まじゅつでもって、みとおしをつけさせようとあせりましたが、だれにも、さっぱりけんとうがつきませんでした。

するとひとりのけらいが、はか場の賢者のうわさをきいてきて、これこれこういうものがいて、どんな、かくれたひみつでも、すぐにみぬいていいあてるといふ話ですから、ためしに、その賢者にそうだんしてごらんになつたらいかがでしょう、といいました。

そこで王さまは、すぐにイドリスをよんでこさせました。イドリスはなんだろうと思ひながら、こわごわ出むいてみますと、これこれで、王さまの金の指輪が、金ざいくしの店先でなくなったのだが、ひとつ、そのゆくえを考えあててみる、という命令です。

イドリスは、はつと思ひました。それでなお、その指輪のかたちだの、ほりかざりのものなどをくわしくきいてみますと、それは、まさしく、自分のくつの中へと

びこんだ、あの指輪です。そこで、

「その指輪なら、夕がたまでお待ちくださいませば、かならず私がさがしだしてまいります。」

と、うけあいました。

夕がたになりますと、イドリスは、さも、自分がどこからかみつけたてきたような顔をして、おかみさんにあずけておいた指輪を持っていきました。

王さまはたいそうよろこんで、いろいろと、ほうびの品物をくださり、どうか、これからさきもこまったことができたなら、すぐにおまえにたのむからといって、しきりにイドリスのふしぎな眼力をおほめになりました。

イドリスのおかみさんは、イドリスが、りっぱなごほうびを、どっさりいただいてきたので、びっくりして、ほくほくよろこびました。しかし、イドリスは、うれしくもなんともありませんでした。うれしいよりも、これでは、王さまになにかのことが、おありのときには、きつとまた私をおよびつけになるにちがいない。さいわいに、あの指輪だけは、ちょうど自分がひろっていたので、すぐにおわたしたようなものの、このつぎ、なにかを

さがせの、みとおせのといわれたら、ぎゃふんとまいるよりほかはない。そんなことでもって、あの指輪も、わしがぬすんでいたということまで、ばれでもしたら、どんな、ひどいおしおきにあわなないともかぎらない。こう思うと、イドリスは、その日から、じっとしていられないほど心配でした。

と、そのうちに、とうとう、やっぱり王さまから、およびだしがきました。

それは、二、三日まえの晩に、王宮へ四十人のどろぼうがしのびこんで、おくらいっぱいの、だいじなたからものを、すっかりぬすみだしてしまったのだそうで、役人たちが、火のようになって八方をしらべつづけているのだが、はんにんが、いっこうわからぬ、それでイドリスに、そのぬすまれた品物のかくしてあるところを考えあててくれというお話です。

イドリスは、こまっと顔をふせていました。王さまはつづけて、

「では四十日間のゆうよをあたえるから、かならずみつけどしてくれよ。このくらのことは、おまえにとつて

はなんでもないことであらう。だからもし四十日たつても返答しなとなれば、それはおまえが、わざとわしをいじめてこまらすものとみとめ、すぐにその首をはねてしまふから、そのつもりでいろ。」

と、いいわたしました。

イドリスは、まさおになつて家へかえってきました。王さまのところへいってどうしたのですと、おかみさんがきききしても、イドリスは返事をさえしません。

「ええ、うるさいね。おまえにいったってどうなるものでもない。どろぼうが四十人ばかりで、王さまのおくらのたからものをすっかりぬすみだしたのだ。その品物がありかを、四十日間にわしがさがしださないと、首をとられてしまふのだ。」

イドリスは、しまいにこういって、ふかいため息をしました。

イドリスは、いくらなげいても、どうにもしかたがないので、しおしおと市場へいって、くるみを、ちょうど四十買ってきました。そしておかみさんにむかって、

「今晚から、このくるみを一つずつくたいて食うんだ。

この四十のくるみがなくなる日には、わしの命もなくなるのだ。」

と、こういって、ぼろぼろ、なみだをこぼしました。

二

話がかわって、王さまのおくらをあらしたどろぼうのかしらは、王さまが、はか場の賢者イドリスに命じて、自分たちをさがしにかかっているといううわさをききこみました。それで、びっくりして、その晩手下のひとりむかい、

「おまえは、これからイドリスの家までかけて、イドリスがなにをいつてるかきいてこい。あいつのいったとおりのことばを、そのままおれに話すのだぞ。」

と、いいつけました。

その手下のどろぼうは、さっそくかけつけました。そして戸のかげに立って、じっと耳をすましていますと、まもなくイドリスは、おかみさんに向かって、

「おい、そのくるみ一つ、ここへよこせ。」

と、いいました。どろぼうの手下は、そっと、戸のか

ぎあなからのぞいてみますと、イドリスは、そのくるみをカチンとたたきわって、こちらのかぎあなのほうをみつめながら、

「四十の一つだ。」

と、いいいい、たべだしました。

どろぼうの手下は、青くなって、かえってきました。そしてかしらにむかって、

「わたしがかぎあなからのぞいていますと、イドリスは私のほうをみて、四十の一つだ、といいました。」

と、返事をしました。

かしらはびっくりして、そのあくる晩は、ほかのふたりの手下に、イドリスがなにをいつてるかきいてこいといっただしました。こんどは人をちがえて、そして、そのいうことがうそでないように、わざわざ、ふたりのものをやったわけです。

そのふたりが、やはりかぎあなからのぞいていますと、イドリスはおかみさんに、

「そのくるみ一つよこせ。」

といって、それをわり、

「えへん、四十の二つだ。」

と、いいいい、かぎあなのほうをみました。

どろぼうのかしらは、それをきいて、なおなお心配しだしました。それであくる晩は、またちがつた三人のものを立ちぎきにやりますと、イドリスは、やはりくるみ一つわりながら、

「あーあ、四十の三つか。」

と、いいいい、戸のほうをみました。

どろぼうのかしらは、これではもうだめだと、がっかりしました。

「イドリスは、自分たちのしたことを、ちゃんとみぬいて知ってるのだ。」

かしらは、みんなにこういつて、そのあくる晩、三十九人の手下といっしょに、イドリスの家へでかけました。そして、おそるおそる地べたにすわって、

「どうぞイドリスさま、私どもの名まえだけは、かくしておいてくださいまし、そのかわり、王さまのおくらからぬすみだしましたものは、そっくりそのまま、ひと品のこらず、おかえし申します。それは、これこれこうい

うあき地にうめて、その上に、白い石を目じるしにおいてあります。」

と、はくじょうして、ひらったくなくて、あやまりました。

イドリスは、これはゆめではないかとびっくりしました。しかし、うわべは、あくまで賢者らしい顔をして、「よしよし、よくじはくをした。それでは、おまえたちの命を助けるために、名まえだけはいわないでおいやるう。だが、ほりだしてみて、ひと品でも数がふそくしていたら、ようしゃなく、おまえたち四十人をのこらずしばりあげるぞ。」

と、おどしつけてかえしました。

イドリスは、あくる朝さっそく王さまのところへかけて、とうなんのお品は、一つのこらず、これこれこういうところにかくしてあるように思われます。すぐにほってみてくださいまし、といいました。

役人たちは、すっかりの品をつんでくるために、馬を三十とうも用意してでかけました。そしてイドリスのことはどおり、ぬすまれた品々を一つかかず、みんな取

りかえしました。

王さまは、びっくりしてよろこび、イドリスには、うまいとうに銀貨をつめるだけつませて、それをごほうびにくれました。

イドリスのおかみさんは、そのたいそうなくだされものをみると、とびあがってよろこびました。

「ごらんない。神さまは、やはりはたらくものをお助けになるのです。みんな、もとをいうと、あなたがあたしのいうことをきいて、はか場へはたらくにでたからです。だから金の指輪も手にはいり、しまいには、こんなたいそうなお金持にもなったのです。」

と、とくいになって、はしゃぎだしました。

しかしイドリスは、なおなお気が気ではなくなりました。こんどまた、王さまからなにかをさがせといわれたら、また命がなくなるわけです。こんどは、なくなったものが、あんなに、すらすらとでてくるわけもありません。王さまは、それからは、よくイドリスをよんで、ごちそうをしたり、イドリスをおともにつれて、いろいろのところへ、でかけたりしました。町じゅうのものはイ

ドリスのことを、このうえなく、うらやましく思いました。

けれどもイドリスは、王さまからさわいだけいただくほど、よけいに命がちぢまるような気がして、ねてもさめても苦つうでたまりませんでした。

ある日、王さまはイドリスをつれて、町のこう外にある大浴場へでかけました。王さまは、その浴場で、いっしょにゆあみをしようといひだしました。しかしイドリスは、そればかりはおゆるしくださいますし、いくらなんでも王さまと一つのお湯にはいるということは、もったいないかぎりです、といって、かたくおことわりをしました。それで王さまは、しかたなく、ひとりで浴場へはいりました。

イドリスは家へかえって、お湯をわかさせました。お湯にはいっていても、イドリスは、自分が王さまから、なんでもみとおす力があるように思われている、その苦しさを考えつづけ、どうかして、じょうずに王さまの手からはなれるくふうはないものかと、しあんしました。

ふとみると、頭いっぱい、シャボンのあわをつけた

自分のすがたが、そばの鏡にうつっています。そのときイドリスは、ふと、そうだ、おれは気がいいになったことにしよう、それがいい、このシャボンだらけの頭をして、すっぱだかで町の中をかけて歩けば、だれだって、おれのことを気がちがったと思うにそういない、それで王さまがゆあみをしていられるところへかけこんで、いきなり王さまのおひげでもつかんでおもてまでひきずりだし、もうこれから、わしをよびつけないようにちかかわせるのが一とうだ。

イドリスはこう思いつくなり、そのままはだかだとびだしました。そして、さっきの浴場へかけつけて、けらいをつきとばして、王さまのはいつていられる浴室へおどりこみ、王さまの口ひげをひつつかんで、はだかのまま、むりやりに庭へひきずりだしました。

と、思うとたんに、古ぼけて、こわれかけていたその浴場のたてものが、ドドドンと、くずれ落ち、中にいたものは、あつというまもなく、ひとりものこらず死んでしまいました。

イドリスは、そのとっさに、気がいいになるよりも、

もっといいことを思いつきました。

「ごめんください、王さま。ぐずぐずしていると、お命があぶないので、私もこのとおり、からだをもふかず、着物も着ないままでとんできましたのです。私は家へかえって湯をあびていました。そうすると、私のまじゅうの手鏡が、大声をあげてよぶではありませんか。私がないのひみつでもさぐりだし、さきのことまでみぬくのは、じつはみんな、私のその小さな手鏡にきくのです。鏡は、たいへんだ、たいへんだ、早く王さまを浴場の外へおひきだしせよ、くずれるくずれる、屋根がくずれる、というものですから、いっしょうけんめいに、とんできましたわけです。」

「ほほう、そうだったか。おかげで、おれもあやうく命をひろった。ああ、あぶなかったね。おまえが一分間でもおくれたら、おれは死がいのになっていたのだ。」

「まったく、私といたしましても、こんなうれいことはございません。しかし、へいか、それといっしょに、私はもはや、ただのつまらない人間になってしまいました。あんまり、あわててとびだすはずみに、あの、かけ